たもんじ交流農園便り 2026年1月号 Vol.94

たもんじ交流農園が育てる、地域のつながり

----人と土をつなぐ、これからの可能性----

鐘ヶ淵町会 青年会会長 瀧澤正宜

私の暮らす地域に、たもんじ交流農園があることを、心からありがたく感じています。都市の中で土に触れ、季節を感じながら人と人が出会える場は、決して当たり前の存在ではありません。日頃から農園を丁寧に守り、運営してくださっているスタッフの皆さまのご尽力に、まず深く感謝を申し上げます。

昨年は、町会青年会の活動として農園をお借りし、ピザ作り体験と芋煮会を開催しました。当日は100名を超える参加があり、「地域にこんな場所があったなんて知らなかった」「子どもがまた来たいと言っている」「大人同士も自然に会話が生まれて楽しかった」といった声を多くいただきました。参加者にも喜んでいただき、町会青年会のスタッフにとっても充実した事業となりました。

一昨年の寺島なすの苗植え体験と収穫祭でも、「自分で育てた野菜は特別においしい」「食べ物を大切にしたいと思った」と、子どもたちの素直な言葉が印象に残っています。農の体験は、楽しさと同時に命や自然への学びを静かに伝えてくれました。

たもんじ交流農園は、作物だけでなく、人のつながりを育てる場所です。世代や立場を越えて顔の見える関係が生まれることは、地域にとって大きな財産です。今後は、この魅力をさらに多くの方に知っていただくこと、関わり方の入口を広げていくことが、次の課題だと感じています。

地域に開かれ、支えられてきたこの農園が、これからも笑顔と学びの拠点として続いていくことを願っています。そして一人でも多くの方がこの農園に足を運び、関わり、地域の未来を一緒に育てていく輪が広がることを、心から期待しています。

25-05-11 苗植え体験会

音楽隊には、瀧澤会長もウクレレで参加

2025年納会開催！

12/28(日)たもんじ交流農園にて、恒例の納会が開催され、餅つき大会に始まり、ウクレレ音楽隊の演奏など、盛りだくさんの内容で、年の瀬らしいにぎやかな一日となりました。つきたてのお餅は、小豆あんこやみたらしで味わい、さらに採れたて野菜を使ったお雑煮もふるまわれ、誰もが自然と笑顔に。会場には温かな空気が広がりました。

この日は瀧澤会長をはじめ、地元・鐘ヶ淵町会の皆さまにも大勢ご参加いただき、地域のつながりを改めて実感する場となりました。世代や立場を越えて、さまざまな分野の方が集い、語り合い、笑い合う——そんな「顔の見える関係」が生まれる、素敵な交流の時間だったように思います。

てらたま・たもんじ2025年納会に参加して 鐘ヶ淵町会 鈴木昇平さん

寺島なすの苗植えイベントは何度も参加したことがあったのですが、納会のイベントがあったことは知りませんでした。今回は鐘ヶ淵町会で案内があり、以前から子供たちが餅つきに興味を示していたため、家族で参加させていただきました。子供たちは目の前で餅つきをするのを初めて見たため、大変喜んでいました。また、つきたてのお餅はとても美味しく、次回もぜひ参加したいと言っています。

たもんじ交流農園のように自然と触れ合える場所は墨田区では少ないため、イベントを通じて子供たちが様々な経験を積むことができるのは大変ありがたいです。今後もよろしくお願い致します。

2025年 たもんじ納会・お餅つき大会・たもんじ音楽隊に参加して

私たち「すみだの’巣’づくりプロジェクト」が、てらたま・たもんじ2025年納会に参加させていただいたきっかけは、たもんじ交流農園の牛久光次さんからお声がけをいただいたことでした。

当日は、野菜の収穫やお餅つきの準備から、楽器の演奏、出来上がった料理を囲む時間まで、参加者が主体的に体を動かしながら交流している様子が印象に残っています。特に、地域の大人の方々だけでなく、小さなお子さんの姿も多く見られ、世代を超えた関わりが生まれている場であることを感じました。

都心部において、人が集い、顔の見える関係を育む場が存在していることには大きな価値があると感じています。今後も、地域の防災力向上に向けた活動を続けていきたいと思います。(芝浦工業大学 すみだの’巣’づくりプロジェクト　鳥居さん)

ウクレレの演奏をバックに、歌わせていただきました。お天気にも恵まれ、気持ちよく、そして楽しく歌うことができました。

実家は多聞寺さんの近くですが、今回、初めて90歳になる母と一緒に農園を訪れました。さまざまな野菜が育てられている様子を見せていただき、このようなイベントに参加できたことで、母の喜ぶ顔を見ることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

夏になったら、また母と一緒に寺島なすを見に行きたいと思っています。お餅もとても美味しく、心に残る素敵な一日を過ごさせていただきました。本当にありがとうございました。(阿部 真理子さん)

年末の気忙しさを感じる中、餅米を蒸す良い香りに引き寄せられるように初めて多聞寺とたもんじ交流農園を訪れました。当日は、数日前にウクレレのクリスマス会で御一緒した小川さんに農園を案内していただきました。墨田区に住んで２３年になりますが、鐘ヶ淵に農園があり、皆様のお力で運営されている事、寺島なすの由来を初めて知りました。

お餅つきが始まり、つき上がるまでの間に参加されている皆様に聴いていただくコンサートが始まり、即席ウクレレ合唱団が結成されました。私は唄の担当でしたが、演奏の方はバッチリでした。(唄の方は？楽しい一時になりましたでしょうか？なりましたよね!!)

つきたてのお餅は格別の美味しさでした。農園で採れた野菜入りのお雑煮まで頂戴しました。本当にありがとうございました。2025年の年末が最高の一日になりました。ご馳走様で～す！(佐藤節子さん)

たもんじ交流農園には、今回の餅つきで初めて伺いました。つきたてのお餅は、あんこ、きな粉、そして農園の菜っ葉のお雑煮と、どれも美味で、気がつけばお餅を８個も食べてしまいました。帰り道はお腹が苦しくなり、少しでも消化を助けようとウォーキング。苦しいはずなのに、なぜか浪花屋で鯛焼きを買っていました。笑笑

多聞寺が近所だったら、cafe さぶたけでも墨田の野菜を扱って、食べてもらえたのになあ、などと考えつつ、お土産でいただいたブレンドの菜っ葉は、翌日のランチでお浸しに。とても喜ばれました。たくさんの喜びと美味しさを、ご馳走さまでした。(工藤千恵子さん)

音楽隊に参加したきっかけは、昨年末の納会の際に、小川さんから「一緒に演奏してみましょう」と声をかけていただいたことでした。サックスを習い始めたばかりの私に、ウクレレに合わせて演奏するなんてできるのだろうかと、不安な気持ちでいっぱいでした。いつもは一人で練習していて、誰かに聞かせたこともありません。レッスンに通っている先生がいない場所で、きちんと音を出せるのか、練習に参加するまでずっと心配していました。

実際にウクレレに合わせて、クリスマスソングや「見上げてごらん夜の星を」をサックスで吹いてみると、ウクレレの音色の良さと、歌いながらの楽しい雰囲気に、時間を忘れてしまいました。不安だった気持ちはあっという間に消え、「ぜひ音楽隊に参加したい」と思うようになりました。

それでも当日は、ちゃんと音が出せるかが一番の心配でした。畑に着くと人の多さに緊張し、体が固まりそうになりましたが、演奏は楽しく終えることができました。何より、皆さんと一緒に音楽の練習をする楽しい時間があったことが、昨年一番のうれしい出来事になりました。

当日の準備や楽譜の用意など、いろいろとお世話になり、また誘ってくださったことに心から感謝しています。どうぞ、これからもよろしくお願いいたします。(栗原典子さん)

1/4(日) 踊る隅田川七福神巡り と すみだ輪おどり に参加！

1/4(日)「踊る隅田川七福神」と題して、恒例の七福神巡りを行いました。
当日は 18 名の方にご参加いただき、隅田川七福神の由来をはじめ、それぞれの神様がどのような神様なのか、また神様が祀られている神社やお寺の歴史について、更に佐原鞠塢や大田南畝、大倉喜八郎など、この七福神をつくり広めた人々のご紹介、お話ししました。加えて各神様と「踊り」との関係についてのウンチクも交え、画像や音楽を使ったオリジナルの七福神クイズで、楽しみながら巡って頂きました。

そしてその流れのまま、錦糸公園・ひがしんアリーナで開催されていた「すみだ輪おどり」にも参加しました。会場となった３階の大体育館では、中央の櫓を囲んで 400 人以上が何重もの輪をつくり、その光景はまさに圧巻。この日は「寺島茄子之介音頭」が“初登場”し、安倍さんご夫妻とゆうさんが櫓に上がると、会場の熱気は一気に最高潮に達しました。
初参加の方も多い中、ほとんどの方が自然に踊りの輪に溶け込んでいく姿は、ただただ感嘆するばかりでした。

踊る隅田川七福神に参加して　中小企業診断士城東支部　寺田伸幸さん

今回、初めて「踊る隅田川七福神」に参加させていただきました。毎年、近所の神社へのお参りは行っていましたが、神社巡りは初めてでしたので、とても楽しみにしていました。当日は晴天に恵まれ、各所を巡りながら、隅田川七福神の歴史やエピソードを、クイズも交えてご説明いただき、たいへん楽しく、貴重な体験となりました。
現代は「コト消費の時代」と言われていますが、わざわざ時間と費用をかけて遠くへ出かけなくとも、身近なところで特別な体験ができることに、改めて感動しました。
途中、福禄寿尊の百花園では、園の職員さんが「てらたま」の T シャツをご覧になっていたのか、「『てらたま』の人たちが来ている」という会話が聞こえてきて、地域における「てらたま」の認知度の高さにも驚かされました。まだ参加したばかりの新人ですが、これからもさまざまな活動を通して、皆さまと素晴らしい体験をご一緒できれば、うれしく思います。

“てらたま農園部から”　第 49 回　～踏み込み温床づくり～

2026 年の農園始めは、踏み込み温床づくり作業の２回目で幕を開けました。各所から集めた大量（軽トラック４杯分）の落ち葉に、米ぬか、もみ殻、水を混ぜ、鋤で撹拌したものをブルーシートで覆い、菌の活動を促す――。ここまでの工程を行ったのが、昨年 12 月 28 日です。
それから約２週間後の１月 12 日、いよいよ鏡開き代わりに、ブルーシートにくるまれた中身の“開帳”です。
落ち葉の小山の外側は冷たく、発酵に至っていない、カサカサに乾いた枯れ葉が多かったのですが、小山の中心部は、掘った場所から湯気が立つほどにまで発熱していました。白い菌で覆われた熱い落ち葉の塊を温度計で測ると、43℃にも達していました。この部分は、おそらく期待通りに発酵が進んでいるはず……。そこで、この「①熱い部分の枯れ葉」と「②冷たい部分の枯れ葉」を混ぜないように２種類に分け、ブルーシートの中身をすべてビニールハウスへ運び込みました。発酵が進んだ①には踏み込みを行い、未発酵の②には再度、米ぬかと水を追加して攪拌し、菌の活躍を期待して積み上げました。
作業をしながら、温度、湿度、酸素、そしてタイミング――温床づくりにはさまざまな条件があり、とてもデリケートな側面があることを、改めて実感しました。どうか今年の菌ちゃん畝も、豊かな恵みを私たちにもたらしてくれる土に育ちますように！

今、気づけば畑にハマってます! 第36回

——私の半生と、畑との出会い—— 関根さん(7-2)の場合

皆さま、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願い申し上げます。

私の夫は、私が 56 歳の時に肺がんで東大病院にて他界しました。これからどう生きていこうかと考え、勤めに出るか、商売をするか迷った末、定年のない仕事を選びました。料理が好きだったこともあり、お惣菜とお弁当屋を始めることにしました。一方で、趣味はソシアルダンスです。もう 20 年以上続けていますが、やり始めると本当に楽しく、先生と踊っていただくと天にも昇るような気持ちになります。

ある日、冷蔵庫の調子が悪くなり、電話帳で調べて秋葉さんに修理・入れ替えをお願いしたことがきっかけで、ご縁が生まれました。その秋葉さんが、ラジオで「たもんじ交流農園」のことを知り「一緒に畑をやりませんか」と声をかけてくださったのです。

正直に言うと、私は土が苦手で、汚れることも嫌いでした。断るのも気が引けて始めた畑でしたが、そこからが大変でした。土を掘り返すこと、肥料の入れ方、種まき、腰が痛くなる作業ばかり。棒はまっすぐ立てたつもりでも曲がっていると言われ、ネットはたるんでいると注意され、自分の不器用さに情けなくなることも何度もありました。

「畑は、すっきり、さっぱり、こざっぱり」これは秋葉さんの口癖です。最初はその意味もよく分かりませんでしたが、今では畑に来ると、ついその言葉を思い出し、雑草や畝の様子が気になるようになりました。

今年の私の目標は、雑草をきちんと抜くこと、畑をきれいに保つこと、そして種を一直線にまくことです。どれも簡単そうで、実はとても難しい課題ですが、次はどうしよう、今度はうまくできるだろうかと考える時間も、楽しみの一つになっています。今は年を重ね、仕事も辞めました。だからこそ、畑に来て野菜の成長を見る時間が、私の生活の中で大きな楽しみになっています。

最初は苦手だった畑仕事に、いつの間にか気持ちが向き、通うのが楽しみになっている——。 これが、私の「今、ハマっていること」なのかもしれません。これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

シリーズ『江戸の食生活と野菜たち』 ~第 11 回~ 農園アドバイザー水口均

閑話休題~"「どんつき」にあるたもんじ交流農園"~

この先ドンツキが「たもんじ交流農園」

たもんじ交流農園の案内板には「どんつき」という言葉が使われています。この言葉は、大阪を中心とする関西方面の方言です。しかし多聞寺のあたりでは、古くから使われてきた言葉（おそらく昭和初期から）だといいます。では、江戸時代を含め、このあたりに関西人が多く住んでいたのでしょうか。調べてみても、特にそのような記録は見当たりません。ただし大正から昭和にかけて、江東区や墨田区は商業地・工業地として発展してきました。水運が盛んな地域特性もあり、多くの職人や労働者が地方から集まり、職住接近の形で暮らしていたと考えられます。そうした人の往来の中で、関西方言である「どんつき（突き当たり）」という言葉が、この地域にも定着していったのではないでしょうか。また玉ノ井（東向島）は、戦前から 1958 年（売春防止法の成立）までは赤線地帯として知られていました。永井荷風がよく通っていたことでも有名ですが、そこには多くの地方出身者がいたはずです。日常の会話の中には、関西地方の言葉が含まれていた可能性も考えられます。いずれにしても「どんつき」という言葉はこの地域に残る昭和初期の名残と言えるのかもしれません。

水口アドバイザーご指導日：1/25(日)、2/22(日)、**農園部作業日**：毎週日曜 8:30~

たもんじ交流農園便り
№94 般 2026.1.26 発行
題字　田村風來門
編集　末林和之
HomePage
てらたま協議会
(NPO 法人 寺島・玉ノ井まちづくり協議会)
問い合わせ先　小川 剛(080-3421-3115)
セブン-イレブン記念財団 (2018 年 2020,年に助成金を頂きました)
FaceBook